



HuRP

ハーブ通信

2011年

5・6月号

(第59号)

<http://www.hurp.info>



3月11日の東日本大震災後、私たち NPO 法人 HuRP は私たちができる可能な方法で、できるだけ早く何らかの方法で支援をさせていただきたいと考えていました。そこでまずは、実際に津波の被害にあわれた地域を訪問し、自らの目で被災地の現状を見て、自らの耳でそこに暮らす方々からお話を聞き、自らの肌で被災地の空気に触れることから始めようと思い、HuRP 有志で5月14日(土)と5月15日(日)の両日、宮城県を訪問し、被災地でのお手伝いをさせていただくことにしました。

いま、私たちにできることは—

被災地ボランティアを経験して (2011年5月14日、15日：宮城県)

宮城県訪問 行程表

◎ 5月14日(土)

- 09:16 東京出発(東北新幹線 やまびこ)
- 11:48 仙台駅到着
- 14:00 塩竈市・松島町、多賀城市へ
- 20:30 うたごえの店バラライカへ
(仙台市青葉区)
- 22:00 宿泊先へ

◎ 5月15日(日)

- 07:45 仙台駅出発
- 20:30 名取市災害ボランティアセンター到着
- 10:00 依頼者宅(閑上)で作業開始
- 15:30 作業終了
- 17:49 仙台駅出発(東北新幹線 はやて)
- 19:56 東京駅到着

◎ 5月14日(土)

仙台駅で新幹線を降りた我々は二手に分かれ、塩竈(しおがま)市と多賀城市をそれぞれ訪問しました。塩竈市と多賀城市はどちらも津波の被害にあわれた地域です。本塩釜駅前から塩釜港へ歩く間に見える建物は一階部分が損傷しているものばかりで、ひっくり返った船や車が転がっていました。マリンゲート塩釜(塩釜港の観光施設)のスタッフに聞くと、「2階まで水が押し寄せた」とのことです。施設内の壁には、水位がわかる痕がはっきりと残っていました。

その後、港から出航している遊覧船に乗り、そのまま松島町へ行くことに。遊覧船の中では、船内スタッフの女性が、塩竈市の被災状況や、復興への思い、また、「自粛をせずに観光に来てお金を使ってほしい。それが支援へつながる。」ということ涙ながらにお話してくださいました。

遊覧船の中から見える島に建つ家屋は建物こそ

宮城県



残っているものの、中は「スカスカ」の状態でした。そのような状況でも、仁王島の複雑な形状をした巨大な岩は、津波前と何ら変わらない状態で残っていました。人間が建てた建物と自然の力により形成された岩。自然の力の強大さを思い知らされました。

夜は、うたごえの店「バラライカ」を訪問しました。店主が「震災前のイメージでは歌がうたえなくなった。例えば、浜辺の情景をうたう歌。うたうと涙を流してしまう人がいる。」とのお話をされた後、「花」（喜納昌吉作詞・作曲）を演奏してくださいました。みなさんご存知だとは思いますが、川の流れを人の生き方に重ねてうたう美しい歌です。確かに、こういう状況で聞くと、胸がつまる思いがしました。

また、店主の「被災したところは元に戻らないかもしれない。でも、元に戻らないんだったら、新しい歴史をつくっていけば良い。」との現実と向き合いつつも前をまっすぐ見たお言葉には、心を打たれました。

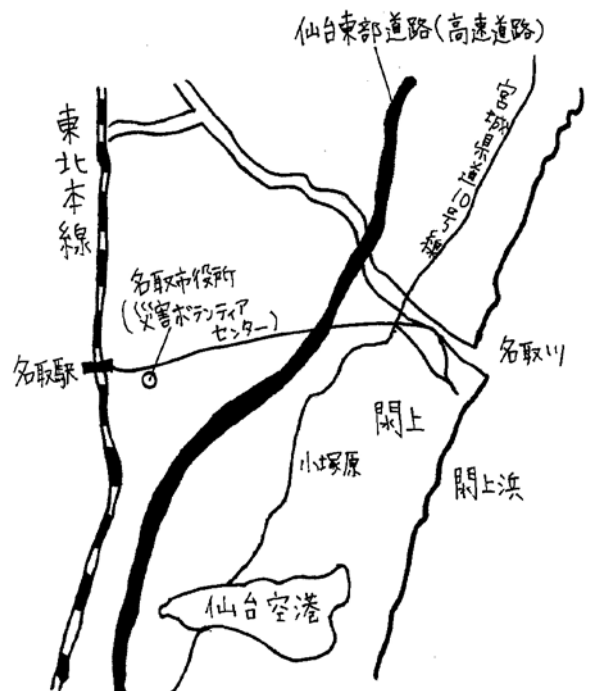
◎ 5月15日（日）

5月15日は、名取市災害ボランティアセンターより派遣され、名取市閑上（ゆりあげ）の民家で土砂とごみの撤去のお手伝いをしました。

名取市の内陸側は、一見すると地震など感じさせないような穏やかな街並みが続いていました。ボラ

ンティアセンターから閑上へ向かう道中も、5月の新緑が青々と茂り、田んぼには黄色い菜の花がかわいらしく咲くのどかな風景が広がっていました。しかし、それは仙台東部道路（高速道路）の高架下を潜り抜けると、一変します。仙台東部道路を境に飛び込んできた原爆投下後のヒロシマ・ナガサキのような惨状に、私たちは言葉を失ってしまいました。名取市内の津波の被害にあった地域とそうではない地域の様子の違いについては、名取市市長もブログにおいて、「災害現場から一歩外に出ると、これまでの生活と何ら変わることのない平穏な日々の生活空間があります。すぐ隣で起きた悲惨な事態が、まるで別世界であるかのような日常があることも事実です。」と書かれています。

ボランティア依頼者のお宅は、建物こそ残っているものの、一階部分の家具等は流され、依頼者は現在も避難所で生活をされている、とのことでした。また、「これからどうなるかわからない。建物は残ったが、この地域には住めなくなるかもしれない。」とおっしゃっていました。住めなくなるかもしれない家だけれどきれいにしよう、と作業を続ける依頼者さんの姿に人間のたくましさを見ました。



今回の宮城県訪問・被災地でのボランティアについて、後日、参加者より文章が寄せられました。一人ひとりの思いをご覧になって、いま、私たちができることについて、読者の皆様にもお考えいただきたいと思います。

HuRP 宮城県訪問、被災地ボランティアに参加して

名取市閑上町でのボランティア活動

T本

名取市閑上（ゆりあげ）町でのボランティア活動のために、仙台へ向かう道中、車窓から見える瓦屋根にブルーシートがかけられている家が、地震の爪痕を伝えていました。

2日目に名取駅から、ボランティアセンターがある名取市民体育館に徒歩で向かう道中も、震災からは落ち着きを取り戻しているように見えました。

体育館が救援物資の倉庫とボランティアの方の集合場所になっていて、その場で人数やグループによって仕事が割り振られていきました。私たちは7人グループで、ちょうど7人での被災地での作業がありました。体育館は壁が剥離しているところがあったりして、地震の被害が大きかったことがわかりましたが、この段階になっても、まだ自分が震災の現場に来ているという現実味があまりありませんでした。

ライトバンにスコップや土嚢袋などの作業道具を積み込み現場に向かいました。市街から現場に向かうにつれ、瓦礫の山や横転している車などが見えてきました。そして、東部道路という高速道路をくぐった瞬間に、景色は一気に変わりました。広がる平野に瓦礫の山、横転している車、船、自動販売機、看板、残っているのは、比較的新しい家だけでした。その家も、一階は壊されていました。

この場所に来るまで「地震、津波の現実味があまりない」と思っていたのが、一度「現実」を目の当たりにすると、今度は「はたしてこれが現実なのか」と、現実味のない光景に、某然としました。テレビや新聞の報道や動画サイトで何回も見ているはずなのに、です。

作業は、もともとビニールハウスがあったとこ

ろを綺麗にするため、土を掘り返し、土に混じったゴミを取り除くというものです。

下を向いて作業をして、ふと顔を上げると、目の前には瓦礫と壊された家々が広がっており、少し落ち込みますが、少しでも被災された方のお役に立とうと作業を続けました。

夕方になる前に作業を終えました。「きれいになりました。ありがとうございました」とお礼をいわれましたが、この地で生きていくためのお手伝いをすこしでもできた事と、もとおりの姿に戻るまでどれくらいかかるのかを考えるにつけ、複雑な思いがしました。

また、ボランティアに行こうと思います。



作業時の服装。資材・ゼッケン以外は持参したもの。下水道も破壊されているため、長靴などは終了後、消毒が必要だった。

災害と行政の狭間で 被災者の一人ひとりが ないがしろにされている

串崎浩

もっと早い時期にと思っていたのだが、震災後2カ月遅れで宮城県名取市閑上地区での被災地ボランティア活動に参加した。

災害時より被災地は復旧したかのような錯覚も多少あったが、実際の名取市閑上地区は地震・津波直後と同じ状態と思えるくらいの状態であり、正直、言葉を失った。

一方政府の復興会議（復旧ではない）は週1回のゆっくりしたペースで「災害後」の議論を行っている。未だある意味「災害時」以上に悪化している被災地の現状とは根本的に「ずれ」た対応だ。

閑上地区では道路はそれなりに整理されているが、私有地に流れ着いた船舶や自動車は当時のまま。被災者の生活環境を元通りにする（復旧）ことこそ、行政が直ちにすべきことではないか（法的問題を解決することが前提となるが）と憤りさえ感じた。

「ここに再び住めるかどうかはわからない。行

作業中に、土砂の中から出てきた腕時計。閑上に津波が到達したと思われる時間で止まっている。



政が決めることだから」と、庭のがれき撤去作業を手伝った家族の言葉を思い出すと、政府・行政は被災地、被災者を一括りにして復興策をアピールしているが、そうではなく、一人ひとりの被災者の生存権を最大に生かすため、被災地復旧と再び災害に遭わないための防災策を一刻も早く現実化し、実施してほしいと思う。再びこの地に来ることを思いつつ、そのことを強く感じた。

ボランティア“作業”から感じたこと

大川仁

被災地の現場に足を運び、体を動かすことで感じたこと、それは被災者の苦しみ・悲しみと比べたら大したことではないが、それはそれで自分なりに大事にしていきたいと思う。

被災地の惨状はすでに新聞・テレビでも映し出されている。今回現地を見た光景も、だいたい報道されている。しかし、被災者宅の庭に津波で流されてきた土砂をスコップで掘り起こす作業の中で、衣類、食料品、CD、本、等々が出てくれば、津波の前にそれらを着たり、食べたり、使っていた人がいたのだ、ということをも具体的に連想することになる。今回のボランティア体験は、何万人という被災者への一般的な救援の必要性をなんとなく感じるだけではなく、具体的に被災された生身の人間一人ひとりに対して、少し前まで我々と同じように生きていた人間一人ひとりに対して、我々は何ができるのか、何をすべきか、を自分自身に問う機会になったように感じている。

おじさん昨日は石巻

A

名取市民体育館では、市の社会福祉協議会が被災した個人の要望を集約し、ここでその日に集まったボランティア希望者と「マッチング」をするのだが、その待ち時間中、陽に焼けた背の低いおじさんが「1.5 トントラック乗ってきたんだけどさ！」と勢いよく入ってきた。年の頃 60 代後半くらいか。スタッフが笑いながら、「今日はそういう作業ないんです、昨日来てくれたらよかったのに。すごい人で車も運転手も足りなかったから。」と言うと、おじさんは気を悪くするでもなく「ごめんごめん、昨日は石巻行ってたんだ。」という。おじさんはしばらく石巻の話をし、作業待ちの席に戻っていった。

私は、驚きを覚えた。飛び込みで、自分のトラックで来て。でも、断られてしまったではないか。第一、必要かどうか確認もせずに来るなんて。こんな時にガソリンだって無駄にできないはず…。

おじさんはその後、活動内容が読み上げられるたび勢いよくハイッ！ハイッ！と立候補するのだが、完全先着順のためなかなかありつけない。最終的には東方面（海沿い）に向かうマイクロバスの運転手に採用されて飛び出していった（トラック置きっぱなし）。

「行っても邪魔になるだけなのでは…」。東北にボランティアに行く、と言うと、そのような反応が多くはなかったか。ニュースも必要以上に、ボランティア受入れ先の「問題」「課題」を強調していなかったか。自分も然り。私は、ここまで来てなお、どのように行動すれば「被災者」に迷惑がかからなくてすむか、そのようなことばかり考えていた。

伝わりづらいのを承知で言うが、私はこのおじさんに、災害ボランティア活動の自由さと力強さをみた。「なあんだ、それでいいのか」である。私が迷惑をかけるはずの「被災者」とは、私が頭

の中で勝手に作り上げたもの。「被災者」は、ひとりひとり顔も違えば都合も違う。自分は、一般化されない、ひとりの人と向き合い、その要望に応じて、手伝いをしたくて来たのだ。それが震災を知るスタート地点だと思うからである。

被災地のために何かしたい、という人は多いだろう。今からであれば、私は現地でのボランティア活動を勧めたい（ぞうきん縫いから支援物資の仕分け、また、センターの掃除でもいいかもしれない。やるべきことは変わりうるが、たくさんある）。もちろん身勝手な行動は慎まねばという気持ちは絶対に必要だし、活動時のルールもある。だが、活動は、もっと自由で、さまざまな智恵と、末永い関わりを必要としているのである。

被災地ボランティア

——「現場」を見て思ったこと

望

「がんばってください」

作業後、そう言って見送られた。がれき撤去のお手伝いをしたお宅のご主人からかけられた一言。

「みなさんお気をつけて」

返す言葉がすぐにみつからなかった。

津波でがれきの山となったお庭からは、われた茶碗やぼろぼろの書類、泥まみれの未開封レトルト食品、日常生活に関わるあらゆるものが出てきた。たった数時間のお手伝い。少しは役に立てたんだろうか。ボランティアセンターに戻るマイクロバスの中で、継続的な支援が必要だということの意味を再確認した。

地道な清掃作業を黙々と続けながら、ときどき世間話をして笑い合うご家族の姿は、目の前の現実を明日につなげようとする強さと、強くならざるを得ない現状の厳しさの両方を象徴しているように思えた。

後日、仕事で画家と話していたら、彼も私た

ちと同時期に石巻市と女川町を訪れていたとのこと。なんでも疎開していた小学校3年時の三河地震で寺に生き埋めになり、曰く死に損なったそうで、震災となるとじっとしてられないという。

「画家として、自分の目で現場を見て、そこで感じたこと、伝えるべきことを絵にして発信するのが仕事だから」

その画家は、近々気仙沼に行きたいとも話していた。

被災地支援の形はいろいろある。画家の絵の完成を待っている間に、また被災地のためにできることをしたいと思う。

末の松山 時代を超えて伝えるメッセージ

瑞穂

百人一首の清原元輔の歌「ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつ すゑのまつ山なみこさじとは」(※1)で知られる歌枕「末の松山」は多賀城市八幡にあります。

「末の松山」が歌枕として初めて登場するのは古今和歌集(905年成立)の東歌とされますが、以後「波が越すことのない」象徴として数々の歌に登場しています。今回の大津波では八幡地区も被災しましたが、「末の松山」は小高い場所にあるため被害を免れました。

東日本大震災の大津波と同規模といわれる「貞観の大津波」が東北地方を襲ったのは貞観11年(869年)のこと。大きな被害の中「末の松山」だけは被災しなかったので「波が越すことのない」象徴とされたのではないのでしょうか。

「末の松山」には津波にまつわる伝説もあります。

一昔、多賀城の八幡に酒が美味いと評判の飲み屋があり、猩々(しょうじょう)(※2)までもが通ってくるようになった。猩々の血が高価であることを知った店主は(または猩々を面白く思わぬ

村人たちは)猩々を殺そうと企んだ。下女の小佐治は不憫に思って猩々に知らせたところ、猩々は「自分が殺されて空が黒くなったら末の松山に逃げなさい」と小佐治に教えた。猩々が殺された後、東の空が真っ黒になり大津波が襲ってきた。小佐治は末の松山に逃げて一命を取り留めたという。――

今回の震災前に書かれた解説には、「ノアの箱舟伝説の一つ」というものもありましたが、震災後の今分かるのは、これは1000年以上前に津波に遭った人からの警告だったのだろうということです。そして時代を超え伝えられた歌や伝説に込められた過去の人のメッセージを読み取ることの大切さを感じます。

私たちが今回の大災害の記録を1000年先の未来の人に伝えるとするなら、どのような形で残せばよいのでしょうか。どのような形であれ風化させないで読み解いてほしい、災害を未然に防ぐ一助にしてほしいと願います。

※1 清原元輔は清少納言のお父さんです。この歌は、女性に振られた友達に代わって元輔がその女性に向けた未練の歌を詠んだものとされています。

(歌の意味)お互いに泣いて涙に濡れた着物の袖を絞りながら約束したのに。末の松山を波が越すことなんてあり得ないように、決して心変わりほししないと約束したでしょう。

※2 猩々は中国の伝説上の動物です。人間の言葉を解す大型の類人猿で酒を好むとされています。もののけ姫にも登場します。またオランウータンの漢名でもあります。



依頼者宅周辺の様子。泥まみれの鯉のぼりが風にそよいでいた(写真中央)。

平和な休日～のほほんのほ子のカフェ散歩～

第11回(最終回):自由が丘 茶乃子

住所: 世田谷区奥沢 5-26-12 久保ビル 1F

<http://jiyugaoka-cafe.info/chanoko/chanoko.html>

今回ご紹介するのは、自由が丘にある茶乃子です。ログハウス風のオープンテラスのあるカフェです。のほ子は、タコライスと抹茶オレ (650 円) を注文しました。のほ子はドリンクを別に注文しましたが、ドリンクセットにもできます。目の前が九品仏川緑道なので、とても気持ちよく過ごせました。(営業時間 10:00~22:00 無休)



～ちょっと寄り道～

日本近代文学館: 自由が丘からは少し離れてしまっていますが、ぜひ行ってみたいところです。のほ子が大学生のときに日本近代文学の講義で、先生に勧められた場所です。当時、文学は政治等とは無関係でそういった力も持たないと思っていたのほ子は、その先生に、文学も世の中を変える力を大いに持ちうることを教えていただいたのでした。6月25日からは「近代文学の名作 大正」をやっているようです。

(休館日: 日・月・第4木曜。6月14~18日は特別整理期間のため休館)

駒場公園内 <http://www.bungakukan.or.jp/>



1年間ご愛読ありがとうございました。書くということに不慣れなため、お読みになっていて不愉快になられたこともあったのではないかと思います。1年間書き続けてこられましたのは、ひとえに読者のみなさまと、HuRPの2人のTさんのおかげです。深く感謝いたします。

さて、のほ子も生活に少し変化があり歩みを変えることになりました。そこで、「平和な休日」への寄稿の仕方を変えてゆくことになりました。今後どうなるかはお楽しみ、ということにさせていただいて、これからののほ子をよろしく願います。(のほ子)

思いやり予算を 被災者支援・復興資金に！

——意見広告掲載

2011年5月15日(日)付の朝日新聞朝刊19面に、「普天間即時閉鎖、辺野古やめろ、海兵隊いらない」沖縄・意見広告運動の意見広告が掲載されました。沖縄意見広告運動とは「沖縄の痛みを、全ての人々の痛みとして、みんなで受け止めよう！」と新聞に全面意見広告を出し、意見表明されている団体です。

東日本大震災では甚大な被害がでていますが、それにも関わらず米軍思いやり予算が承認されています。今回、思いやり予算を被災者支援・復興資金にあてるべきだということを訴える活動も始めたということで、HuRPもこの活動の趣旨に賛同し、寄附を行いました。意見広告に名前が小さく掲載されています。

沖縄意見広告運動(第二期) <http://www.okinawaiken.org/>



HuRP 通信 2・3月合併号、4月号で東日本大震災の被災者の皆さんへの義援金をお願いしましたところ、5名の会員様より、義援金をいただきました。あたたかいご協力、本当にありがとうございました。

被災地ではまだまだ多くの支援が必要な状況です。HuRP では継続的に義援金の募集をしております。引き続きご協力をお願いいたします。

HuRP 通信 2・3月合併号でもお知らせしておりますが、2011年度の会費の中から、一定額を義援金とさせていただきますことを決めています。引き続き、会費の納入をどうぞよろしくお願いいたします。

- ・郵便局口座 口座番号 00180-8-280207
口座名称「特定非営利活動法人 人権平和国際情報センター」
- ・銀行口座 みずほ銀行九段支店
(普通) 1013386
「NPO 法人 人権・平和国際情報センター」

◆編集後記

みなさま、はじめまして。今号から編集を担当することになりました、サヤカです。
突然ですが、私はこの春新しいことがふたつ始まりました。一つ目は、この HuRP 通信の編集を任されたこと、二つ目は、お仕事を始めたことです。

私は今まで大学院で「子どもたちの役に立つことをやりたい」という目標を持って勉強してきましたが、縁あって、この春から児童福祉に関わる職場で働くことになりました。現在は、特に0歳～3歳ぐらいの子どもたちと接する日々を送っています。

今号は、HuRP 被災地ボランティアの報告を紙面2倍にして5・6月合併号でお送りしました。
今回のボランティアで、私が一番印象に残ったのは、閑上で見た電柱に貼られた張り紙です。それは、「8ヶ月の息子を捜しています」の文字とともに、にっこり笑う赤ちゃんの写真が載っているもの。

大切な人が突然いなくなってしまうことほど、辛いものはないでしょう。それは、職場で出会う、自分の子どもを愛おしそうに抱くお母さんお父さんの姿を見ていると感じます。

ボランティア依頼者宅での作業中、依頼者ご家族は冗談を言い、笑い合いながら作業をされていました。辛い状況でも笑うことができる。それは、「大切な人がそこに生きている」、ただそれだけで可能なことなのだと思います。

私たち HuRP は「人権」の重さや「平和」の尊さを大事に思い、日々活動しています。「人権」や「平和」というと、スケールが大きくて、何だかよくわからないものになってしまいがちですが、その原点には、「生命」があります。生命を大事にしよう、これが HuRP の活動の原点です。今回、被災地で出会った人や見たものから、活動の原点を再確認しました。抽象化されることのない、具体的な一人ひとりの「生命」のために、HuRP はこれからも活動していきます。 (サヤカ)



特定非営利活動法人「人権・平和国際情報センター」(HuRP: ハーフ)

Human Rights and Peace Information Center JAPAN (HuRP)

〒101-0065 東京都千代田区西神田2-7-6 川合ビル41号室 TEL&FAX 03-3234-3231
e-mail hurp@hurp.info HP <http://www.hurp.info/>